論　文　ニダバ (*Nidaba*) 37(2008), 183-192

日本語と中国語における「金銭」に関する諺対照比較研究 1

銭　　清

1. はじめに

一般に、言語表現の上から、その言語を使用する民族集団の文化の特色を見て取ることができる。特に、日常生活から生まれ、民衆の智恵の結晶として使われてきた諺は、各民族それぞれの伝統的な物の見方・考え方を濃厚に反映している。金銭に関しては古来多くの諺、格言が伝えられている。これらの諺には、多年にわたる人々の生活の姿や考え方が示されており、金銭に関して多くのことが言われているのは、人々の生活と金銭との深い関わりを示すものにほかならない。また、金子（1983a, p.203 ）は金銭の諺に関して、「人間が物質的、経済的な力から離れて生活できない限り、金の威力は実に大きい。金は物質的、経済的力の手形だからである。」と述べている。日中両国語には、そうした様々な「金銭」に関しての諺を見ることができる。

そこで、本稿では、「金銭」が使われている両国の諺に着目して、諺の中に見られる共通点と相違点を明らかにし、日本と中国の風俗、文化、民衆の考え方を考察する。

2. 分析資料と方法

本研究の対象として取り扱うのは、日中両言語における「金銭」に関する諺である。

日本の諺の用例は『故事俗信諺大辞典』（小学館　1982）を資料母体とする。また、『日本の諺　評論』（金子 1983）を日本語の基本的な諺とする。

『故事俗信諺大辞典』(小学館　1982)はいろいろな由来を持つ諺や俗説など約 43,000 項目が収められている。様々な成り立ちの表現を、文献、資料として記録し、専門辞典としてこれまで見られない規模となっている。

一方、中国の諺は、『中国諺語大全』（温 2004）と『諺語大典』（張 2004）の資料を中心に、諺の用例を取り出した。『中国諺語大全』は、約 100,000 項目の諺を収録している。古今の文学作品からの用例や古代文献及び方言からの引用もされており、内容的にも、詳しい例文を加え、難解の語彙についても解釈が付いている。また『諺語大典』は、内容としては、46 テーマ、308 項目に細かく分類され、中国語の諺への理解もいっそう深まるように作られている。

考察方法としては、上述の諺辞典から「金銭」に関する諺を取り上げそれぞれの諺の意

味内容と表現を対照比較する。両国の諺を対照しやすくするために、日本語の諺には「J」、中国の諺には「C」という符号をつけ、中国語の解釈は『中国の俗諺』（田中 1979）を参考にしながら、筆者の直訳を付す。本稿では、金銭の威力と金銭の毒をめぐり、日本語と中国語の諺対照比較を試みる。

3　金銭の威力

金のあるなしが貧富となり、それがその人の人生に大きな影響を及ぼすことは、いつの世でも同じことである。では、金はどのように人生に大きな影響を及ぼしているのであろうか。次の面を見よう。

3.1　金の力

金銭に関する諺として、次のようなものが一般に知られている。これらはいずれも金銭の威力の大きさ、金銭万能を唱えるものである。

(日)　J1. 先立つものは金
J2. 人間万事金の世の中
J3. 金が物言う
J4. 金さえあれば天下に敵なし
J5. 金にまさる宝なし
J6. 成るも成らぬも金次第
J7. 金の轡を食ます
J8. 金が言わする追従
J9. 金で面を張る
J10. 金を言わせる旦那
J11. 金さえやれば行き先で旦那
J12. 金の光で馬鹿も利根に見える
J13. 金さえあれば飛ぶ鳥も落ちる

(中)　C1. 有了钱、万事圆
金があれば、何でも円満
C2. 有钱钱做主
金があると金が話をつけてくれる
C3. 吃遍天下盐好、走遍天下钱好
天下を食べ歩くと、塩が一番よい。天下を歩き回ると、金が一番よい
C4. 有钱王八坐主席、落魄鳳凰不如鸡
金のある阿呆は上座に座り、落ちぶれ鳳凰は鳥にも及ばない
C5. 有钱王八大三辈
金のある阿呆（すっぽん＝女房をとられた男）は三親等高い

C6. 有钱长人 30 岁

金があれば人より三十歳も年上になる

C7. 见钱眼开、福至心灵

金を見ると目が開き、幸せが来ると心が勇みたつ

C8. 瞎子见钱也眼开

金を見ると盲人まで目を開ける

C9. 火到猪头烂、钱到公事办

火のまわりよければ豚の頭とろけ、銭ゆきわたれば役所ごと捗る

J2 と C1 とも「万事」という言葉が現れて、何をするのにも、まず第一に必要な物は金である。物事がうまくいくのもいかないのも金のあるなしによって決まる。金銭を持っているうちだけはどんな願望もかなって、まるで極楽世界にでもいるようであることを示している。これは日中に共通の金銭の威力についての考え方だといえよう。J3、J4 は言葉や道理によって解決できないことでも、金銭が威力を発揮して容易に解決する。世間の諸事はすべて金銭の力で解決される。金力さえあれば、権力でも武力でも、天下に敵となるものはないという意である。さらに、J6 は金銭ほど便利で有効な財産は他にない。このように、金こそすべてだということを強調している。

J7 の轡は、馬の口にふくませ、手綱をつけて馬を扱う道具である。金属の轡。転じて、人の口を封じるための金銭である。金の轡をはめるの形で、金を与えて口止めする意にいう。J10 の「はる」は撲り付けて相手をこちらの意に従わせる意である。つまり、金の力を借りて無理やりに相手を屈伏させる。J8 は金銭のためには、心にもないお世辞も言うものである。このように、金銭の威力はすさまじく、どんな相手でも金に物言わせれば思いのままにできること強調している。この沈黙は、「沈黙は金」の沈黙ではなく、本来異議を唱えるべきところを曲げた屈服であることは言うまでもない。嫌な世の中、現実に「金が物言う」ことが少なくないことも確かであろう。諺は、現実を冷静に見つめるとともに、そう言い切ることによって辛辣な批評ともなり得るのである。

J10、J11、J12、J13 と C4、C5、C6、C9 は表現的にはよく似通っている。特にここに注目したいのは、J10、J11 で使われている「旦那」と C4、C5 で使われている「王八」の二つの言葉である。J10、J11 の「旦那」もともとは、寺にお布施を出してくれるのが旦那（檀那）だった。商家などでは、雇い人から見て主人が旦那であるが、これも金（給料）を出してくれる人である。妻から見て金を出して養ってくれる夫も旦那、妾から見て金を出して囲ってくれる男が旦那、商売人から見て金を払って買ってくれる男の客が旦那である。要するに金を出してくれる男性が旦那にほかならないから、この諺はまさしく「旦那」の正しい定義となっているのである。このようにだれでもほしいと思う金だから、これを持ってさえいれば、「旦那々々」とうやまわれる。「旦那々々」と言われるのはその人の人柄のためではなく、その人の持っている金が言わせているのだということである。また、J12 のように金銭を持ってさえいれば、世間の人からは、馬鹿でも利口者のような扱いを受け、

また旦那々々と尊敬され、持ち上げられるようになる。J13 の「飛ぶ鳥を落とす」といえば、権勢のさかんなことを言う。

C4、C5 の「王八」は、孝・弟・忠・信・礼・義・廉・恥の八徳を忘却した者のことで、とりわけ八番目の恥を忘れた恥知らずのことであり、はじめは「忘八」といったのが、同音の「王八」となったのだという。また、「鼈」を「王八」という。自分のつれあいの雌が、他の雄と親しみ合っていても一向に嫉妬もせず、追っ払いもしないで、平気な顔をしている。だから恥知らずの「忘八」すなわち「王八」である。そこで、人を罵る時の「馬鹿野郎」と同様に遣われている。さらに、エゲツナイ悪罵に「王八蛋」がある。蛋は卵のことだから「子」の意味で、王八の子は、お袋ははっきりしているけれども、乱交の子であるから父は判明しない。つまり父親なし子だと罵ることになる。金の力がものを言って、少々頭がおかしくても、旦那々々とおだてながら上座に座らせられる。ところが一旦、落ちぶれてしまえば、途中で逢っても横を向いて相手にしなくなる。鳥類の王といわれる鳳凰でも同じことで、権威を失えば掃溜の鶏以下に取り扱われる。また、C5 の「輩」は、親子、兄弟、同僚などの間の順位のことで、「輩行」という。昔の中国では、一親等ちがえば、対等に物が言えなかったことを考えると、三親等ちがえば、それから来る尊敬の度合いは、大変なものである。C6 では、豚の頭骨は堅くて煮えにくいという定評がある。それでも、とろ火で気長に煮れば軟らかくとろけてしまう。ましてや、はじめから軟らかい役人どものこと、上手に万遍なく袖の下がゆきわたれば、どの部署もスラスラと通過するのは当然である。

以上のように、どんな権力、威力よりも金力こそ最高万能のものだということを示唆しているために、比喩表現が多く見られて、興味深い。

3.2 金銭がないことの苦痛

そのほか、日本語の諺の金の力をストレートに表現していると違って、中国語の場合は金がない時の考え方も数多く現れている。これらの諺の中には金のある場合と金のない場合を対立的に、対句形式を用いて表現する方法が見られる。

（中） C10. 无钱寸步难行

金がなければ一歩も動けない

C11. 无钱是路人

金がない時まるで赤の他人

C12. 手里无钱活死人

手元に金のないのは、生きている死人

C13. 有钱千里通、无钱隔壁聋

銭があれば、千里の遠い所でも知ることができ、金銭がなければ、壁一つ隔てた隣の様子も知ることができない

C14. 有钱一条龙、没钱一条虫

金があれば一匹の龍、金がなければ一匹の虫

C15. 有钱成了亲、无钱当作奸情打

金があれば結婚でき、金がなければ不義としてなぐられる

C16. 有钱高三辈、无钱低三辈

金があれば三親等高く、金がなければ三親等低い

C17. 有钱30为老相、无钱80做长工

金があれば三十歳で顔役になり、金がなければ八十歳でも人に使われる

C18. 有钱能说话、无钱话不灵

金があるとよく話しができる、金がないと物を言っても効きめがない

C19. 有钱贤良、没钱变相

銭があれば賢くて善良、銭がなければ人相も変る

C20. 有钱就朋友、无钱没人理

金があったらすぐに友達、なければだれも見向きもしない

これらはいずれも「金銭のないことの苦痛」を示唆しているものである。C10 が表すように、旅行に行きたくても、金がなければいけない。金がないのと道がないのと同じである。転じて、何もやれない、という意味にも使われる。C11、C12 では、金がない時まるで赤の他人のような、生きている死人のような者である。また、金は人間関係や人格まで変えてしまう魔力を持っており、世の中銭があれば何でもできるが、なければ簡単なことでもできないことは、C13、C14、C16、C20 で知ることができる。実際世の中、「金がなければしゃべる言葉がない」、何かの行事についていろいろと相談をしている時、金のない人が口出しをすると金をださない人は黙ってろ」といわれる。どのように仕事をすすめるかは「お金を出す人が決める」。また、貧乏青年が金持ちの娘の家へ求婚に行ったとしても、貧乏青年は話すことができない。何から話しても、何を話しても必ずお金のことで引っかかることもしばしば目にかかる（C15 ）。金があれば、「金持ち喧嘩せず」といわれるように、精神的ゆとりもでき、顔つきもおっとりとして、善良に見えてくる。貧乏に追われる生活では、しょぼくれて、人相までがまずしそうに憔悴してしまう（C19)。

一方、日本語の諺は次のような面白い比喩表現がある。

（日）J14. 金のないは首のない劣る

これが金のないのが首のないよりつらいことを示唆している。金がないくらいなら死んだほうがまし、金銭のないことの苦痛をいうたとえである。確かに、この世に生きている限り、金持ちである必要はないにしても、必要な金がないのはなんとも情けないものである。

3.3 金のありがたさ

金は必要不可欠であるからこそ、金があることは何よりも「有り難い」のである。金の有り難さを表す諺は、次の例に見られる。

（日） J15. 金の光は七光り

J16. 金の光は阿弥陀ほど

J17. 金は町人の宝物

J18. 金のある間が極楽

J19. 金の敬いによって位を増す

J20. 千金は死せず　百金は刑されず

（中）C21. 千金不死 百金不刑

千金で死を免れ、百金で刑免れ

J15の「七光り」は君主や親などのお陰で、その余光が広く遠く及ぶこと。日本語の諺は「親の光は七光」ということがある。「金」の光は「親」のひかりなどのもじりか、金持ちの威力が遠く広く及んで世間の人から尊敬されるさまを言う。J16は金の持つ威力は阿弥陀の霊力ほどの力があるという意である。金銭のありがたさ阿弥陀の霊光にたとえ語金の有難みは何にもまさる。精神的な援助などの比ではない。ここには、J16とJ18の「阿弥陀」、「極楽」の二つ言葉から、仏教の影響は日本の庶民の考え方に及んでいることが示されている。J17は武士にとって刀と槍が宝であるように、町人にとって金銭こそ何ものにもかえがたい宝ものの意である。「封建社会から近代資本主義への移行は、士農工に代る町人社会の出現を意味するものであった。その町人の世界をえがいた井原西鶴は、町人にとってもっとも必要なのは金銭であり、金銭を積極的に肯定したのが、西鶴を通してみた町人社会の金銭観である。」（cf. 井原 1957）J19の位は威光、威力である。金持ちを敬うのは実際にその金力に対してのものなのだが、結果的に金力がその人に威光を増し加えることになる。J20とC21の対応について、実は、『故事・俗信ことわざ大辞典』によると、この諺の出典は「今世諺云、千金不死、 百金不刑」（尉女寮子ー将理）である。もともと中国から日本に伝来してきたものなので、表現も内容もまったく同じである。

3.4 神（信心）より金

さらに、神あるいは信心との関連で見ると興味深い表現があげられる。利欲から解脱しているはずの仏でさえ、金銭によって動かされ、人を食う恐ろしい鬼でさえ、金銭によって動かされるとせられるのである。

（日） J21. 出雲の神より恵比須の紙

J22. 仏の光より金の光

J23. 阿弥陀の光も銭次第

J24. 銭あるとき石仏も頭を返す

J25. 銭あれば木仏も面を和らぐ

J26. 銭あるとき鬼をも使う

J27. 地獄の沙汰も金しだい

（中） C22. 有钱能使鬼推磨

銭があれば、地獄の鬼にひき臼を引かせることができる

C23. 有钱好买黄泉路、大户人家不死人

銭あれば黄泉路の旅も好き勝手　富豪の家は死ぬ人が稀

C24. 钱能通神

銭よく神に通ず

C25. 玉皇拜财神、有钱大三辈

玉皇（天上最高の神）も福の神に頭を下げる、金があれば三親等も高い

J21 は比喩的に金の有り難みを述べたものである。「神」と「紙」をかけてあり、「恵比須の紙」とはいうまでもなくお札のことである。出雲の神は縁結びの神様で、そのご利益はありがたいが、そういう無形のサービスよりもやはり現金がものの役に立つ。お祝いでもお見舞いでも、もらうなら現金でもらいたい。誠意も感謝も、その大きさは金額であらわされる。それ以外の形でも表すことができるが、金で表すのが一番である。このように、人の心は、仏の教えより金の力に引かれやすいことを暗示している。

C23 は富豪とか金満家といわれる家では、常日ごろから栄養がよく、大人も子供も病気にかかりにくいが、たまたまかかったとしても医師の手当が早いから、大事に至らず、従って死人が出たりすることは稀である。けれども、老齢を迎えて寿命が尽きる場合もないわけではない。そんな場合には、今度はまた、金力にものをいわせて閻魔大王の買収に取りかかり、間違っても地獄へなぞいかないように、大作戦を展開する。金銭の力の前にはだれでもなびくことをたとえている。

J26、C22 は意味的には相通じているところがある。銭があれば、どんなものでも、相手がたとえ鬼神であろうとも使役することができる。金銭は人を思うままに動かすことができるということを表している。現実には、J24、J25、J26、C22、C23 で表すように「石仏も頭を返す」、「木仏も面を和らぐ」、「鬼をも使う」、「地獄の鬼にひき臼を引かせる」、「黄泉路の旅も好き勝手」はずはなかろうが、むしろ常識的には不可能な比喩を持ってきて誇張することによって、並の手段では不可能なことまで可能にする金の威力を印象づけている。違うところとしては、中国語の「鬼」と日本語の「鬼」の意味である。中国の「鬼」は生きている人に様々な害を与える可能性のある恐ろしい者で、日本語で言えば、亡霊、幽霊である。日本語の「鬼」は、お祭りに踊るなど、どこか可愛らしさがある。ここから恐ろしい鬼までお金で利用しようとする中国人はどのぐらい金に執着するかが窺える。

J27 の「沙汰」は裁断・裁判の意。地獄の裁きでさえ、金次第でどうにでもなるということから。世の中のことは金さえあれば何でもできるし、どうにでもなるということである。竹内（1999　p7）では J15 について次のように述べている。「人には利益を与え、利益で誘導せよ。この原則が通用しないところはない。例えば閻魔大王の裁きも、金さえ積めば、こちらの有利に取りはからってもらえるだろうというわけである。・ルールなんか金でいくらでも曲げられる、曲げられないといわれても、もっと金を出せば話しは別だろう。とこの人たちは考える。社会と人間をこんなふうにしか見られない人の頭は実に固い。こ

こまで来ると、人は必ず金で動くものだというこの信念はほとんど信仰に近い。おそらく、自分自身が金次第で動く人間だから世間もそうだと信じて疑わないのであろう。」

以上の諺から、仏教思想は日中の諺に影響も及んでいると考えられる。

4. 金銭の毒

富への執着はすべての悪の根である。この世のもろもろの悪事と苦悩は金に対する異常な執着から生まれる。本来、諸悪の根源とされたのは、金を愛することであって、金ではなかった。それがいつの間にか誤って引用されて、金が悪者になってしまった。悪いのは、やはり、金に執着する人間の心である。拝金思想が人の心を蝕み、それが悪事の温床になっている。金銭欲に目がくるみ、金儲けに狂奔することが様々の悪事を生み、身の破滅を招くとともに、世の中を乱すもととなる、というわけで、金が悪い物だとする考え方も広く見られる。

「こういう「金悪説」は西洋ではギリシアの昔からあったし、『旧約聖書』や『新約聖書』にも「金悪説」が繰り返し説かれている。キリスト教が社会生活を支配した中世においては、金を求め、金を増やそうとする経済活動が目の敵にされていたことは言うまでもない。そこでキリスト教の建前としては、金を貸して利子を取ることは許されざる行為であった。このような「金悪説」、反金儲けの宗教論理が支配していたキリスト教世界の中から、金儲けを神に与えられた使命のように考える「資本主義の精神」がなぜ、どのようにして出現したかは、マックス・ウェーバーの有名な説明を聞いてみても、なお大きな謎である。」(cf. マックス・ウェーバー　1994)

「日本にはこのキリスト教に見られたほど強力な「金悪説」は存在しなかった。むしろ金の威力については誰もが承知しており、金がないことこそ諸悪の根源であることを人々は知っていた。それだけに、金のない人や金でしくじった人たちは金を目の敵にし、金を恨むのである。」(cf. 竹内　1999)

次の諺が「金銭が万能という事実の裏返し」を表すものである。

（日）　J 28. 金が恨みの世の中

J29. 金が敵の世の中

J30. 金は芸減らし

J31. 財宝は地獄の家苞

J32. 金はすべての悪の根元

（中）　C26. 人为财死、鸟为食亡

人は財のために死に　鳥は食のために命を失う

C27. 言多语失皆因酒、义断情疎只为钱

いらぬことをしゃべって失敗するのは、みな酒がもと、義理人情を断つのは金がもと

J28 は、世の中におこる出来事すべては金が原因で、悩まされ苦しめられ、不和反目し合

い、まるで金は仇をなすかたきのようなものを表している。もう一つの解釈は尋ねる敵のように、金銭にはなかなかめぐりあえないこと。金銭を得るのが難しいことのたとえ。J29とJ28はほぼ同じ意味で使われている。J30には、芸人が、金銭に心を引かれるようになると、それにつれて芸の力はかえって劣っていくということを表している。金銭に恵まれている者は、それを恃んで芸を磨こうとはしないから、芸が上達しないということ。J31とC26は表現的には相違しているが、結果は同じである。つまり、この世で財産や宝物をいくら蓄えても、それは地獄に行く原因を作るだけである。人は財富に対する欲望のために、あくせくしながら生涯を終える悲惨な結果が語られている。

5．考え方の特徴

以上、金銭に関する諺に見られる中国と日本の両民族の考え方を、大まかに分けて検討したが、そこには、内容的に類似した点が多く見られた。それを、次に、簡単にまとめてみる。

5.1「類似点」

①金の力に関しては、両語の諺ともに同様な考え方が見られる。「金」は人の運命や努力如何によることが多いが、金を欲する気持ちは両国同じようである。特に、日本語と中国語の諺の表現には、かなり共通点を見ることができる。金銭を持ってさえいれば、世間の人からは、馬鹿でも利口者のような扱いを受け、また旦那々々と尊敬され、持ち上げられるようになる。ところが一旦、落ちぶれてしまえば、途中で逢っても横を向いて相手にしなくなる。

②金のありがたさへの言及は、J20とC21の対応について、実は、『故事・俗信ことわざ大辞典』によると、この諺の出典は「今世諺云、千金不死、 百金不刑」（尉女寮子－将理）である。もともと中国から日本に伝来してきたものなので、表現も内容もまったく同じである。

③神（信心）より金に関しては、日本語と中国語の諺に使用されている素材「鬼」には、かなり共通点が見ることができる。銭があれば、どんなものでも、相手がたとえ鬼神であろうとも使役することができる。金銭は人を思うままに動かすことができるということを表している。ここから、仏教思想は日中の諺に影響も及んでいると考えられる。

5.2「相違点」

① 金銭の威力の大きさに関しては、日本語の金の力をストレートに表現していると違う、中国語の場合は正反対から大金がない時の考え方も数多く見られる。これらの諺の中には対句形式を用いて表現するのが面白い。

② 金のありがたさを表す諺は数量から見れば、中国の諺より日本のほうが多い。仏教の影響は日本の庶民の考え方に及んでいることが示されている。

③ 神（信心）より金に関しては、日本語と中国語の諺に使用されている素材「鬼」には、多少の意味が違う。中国の「鬼」は生きている人に様々な害を与える可能性のある恐

ろしい者で、日本語で言えば、亡霊、幽霊である。日本語の「鬼」は、お祭りに踊るなど、どこか可愛らしさがある。

6. 終わりに

以上、金銭の威力と金銭の毒に言及している諺について対照比較考察を行った。これら日中の諺は同じ物事に関する論述も多く、金銭そのものはもとより善でも悪でもない、しかしそれは人間を醜くしたり、悪の道に走らせたりするという同様な考えを表しているのに、民俗の文化・考え方の反映が見られ、それぞれの言語の表現の仕方は異なっており、その相違に興味深いものがある。それは、日中両国の国民の異質の文化を背景にし、作られた諺だからである。

誌面の都合で、「金銭の貸し借り」、「金銭と人情」に関する対照考察ができなかったが、次の機会に、稿を重なることにする。

【参考文献】

井原西鶴（1957）『西鶴集　下』岩波書店

浮田三郎(2002)「日本語と現代ギリシア語における「友」に関する諺対照比較」『言語学論集』溪水社 pp121－135

浮田三郎（2005）「現代ギリシア語と日本語における金持ちと貧乏に関する諺の対照研究」『プロピレア』第１７号　日本ギリシア語ギリシア文学会　pp23－32

金子武雄（1983a）『日本のことわざ　評論』海燕書房

温端政（2004）『中国諺語大全』　上海辞書出版社

北村孝一（1987）『世界ことわざ辞典』　東京堂出版

尚学図書編集（1981）『故事俗信諺大辞典』小学館

竹内靖雄（1999）『諺で解く日本人の行動学』東洋経済新報社

張一鵬（2004）『諺語大典』漢語大辞典出版社

田中清一郎（1979）『中国の俗諺』白水社

マックス・ウェーバー（1994）『プロテスタンティズムの論理と資本主義の精神』未来社